中世益田講座　第2回（全9回）

「益田氏」ってどんな人達？

2代 兼実 → 3代 兼栄 → 4代 兼高 → 5代 兼季 → 6代 兼時 → 7代 兼長 → 8代 ? → 9代 ? → 10代 兼世 → 11代 兼見 → 12代 兼世 → 13代 兼家 → 14代 兼理 → 15代 兼堯 → 16代 貞兼 → 17代 宗兼 → 18代 尹兼 → 19代 藤兼 → 20代 元祥 → 21代 広兼

益田荘の荘官となる

中世都市益田の基礎を作る

雪舟と親交を持つ

毛利氏と和睦する

毛利氏に従い益田から須佐へ移る

鎌倉時代初めから安土桃山時代までの約500年間、石見西部一帯を支配していた益田氏は、もとは石見国府（今の浜田市にあった国の出先機関）の役人で、藤原姓（のちに御神本に改名）を名乗り、浜田・御神本の地を本拠としていました。

石見最大の益田平野を中心とする荘園（皇族や貴族、有力なお寺や神社に寄進された地方の田畑）「益田荘」の開発を進め、自らはその荘官（現地管理の役人）として本拠を益田に移し、姓も益田に改めました。

南北朝時代になると、中央に住む荘園領主（皇族や貴族など）にとって代わり、「益田荘」の実質的な支配を行うようになります。三宅に居館を構え、七尾城下町の整備を行うなど、中世都市益田の基礎を築きました。以後、石見国の武士団としての地位を高めつつ、大内氏（山口県）、その後は毛利氏（広島県）に従いながら、室町幕府とも直接的な関係を強め、山陰有数の武士団へと成長しました。

戦国時代には、海運の拠点として博多の一部や萩沖に浮かぶ見島をも領有し、交易による強固な経済基盤を築きました。

写真提供：島根県立石見美術館

※この系図は、井上寛司氏の研究に基づくものです。系図には、諸説あります。